

羣芳圖譜

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



415-1\*



### 序

過日は高著群芳圖譜御携贈被成下感謝仕候。花卉の寫生眞に迫りて人の美感を満足せしめ解説の雅趣また胸懷を快くす。唯た好畫家の愛玩なるのみならず、専門家の參考になるべき絶好畫譜と被存候。往年植物園に寫生の筆を執られし以來、藝術家の本分を堅守して艱難と闘ひ、研究に努力せられし效果空しからず、本書によりて頼に光輝を發揮したるは全く貴兄が自家の力によりて自家の運命を開拓せられたるものに候。且つ序文によりて和田英作、長田偶得二君が本書の製作に與り居らるゝことを知り、其奇縁に感じ申候。二君は小生多年の友人に候。不朽必傳の畫譜が貴兄及び二君の合力に成ることは、小生身に取りても、亦眞に喜ばしき次第に候。こゝに所感を併記して謝意を表し候。敬具。

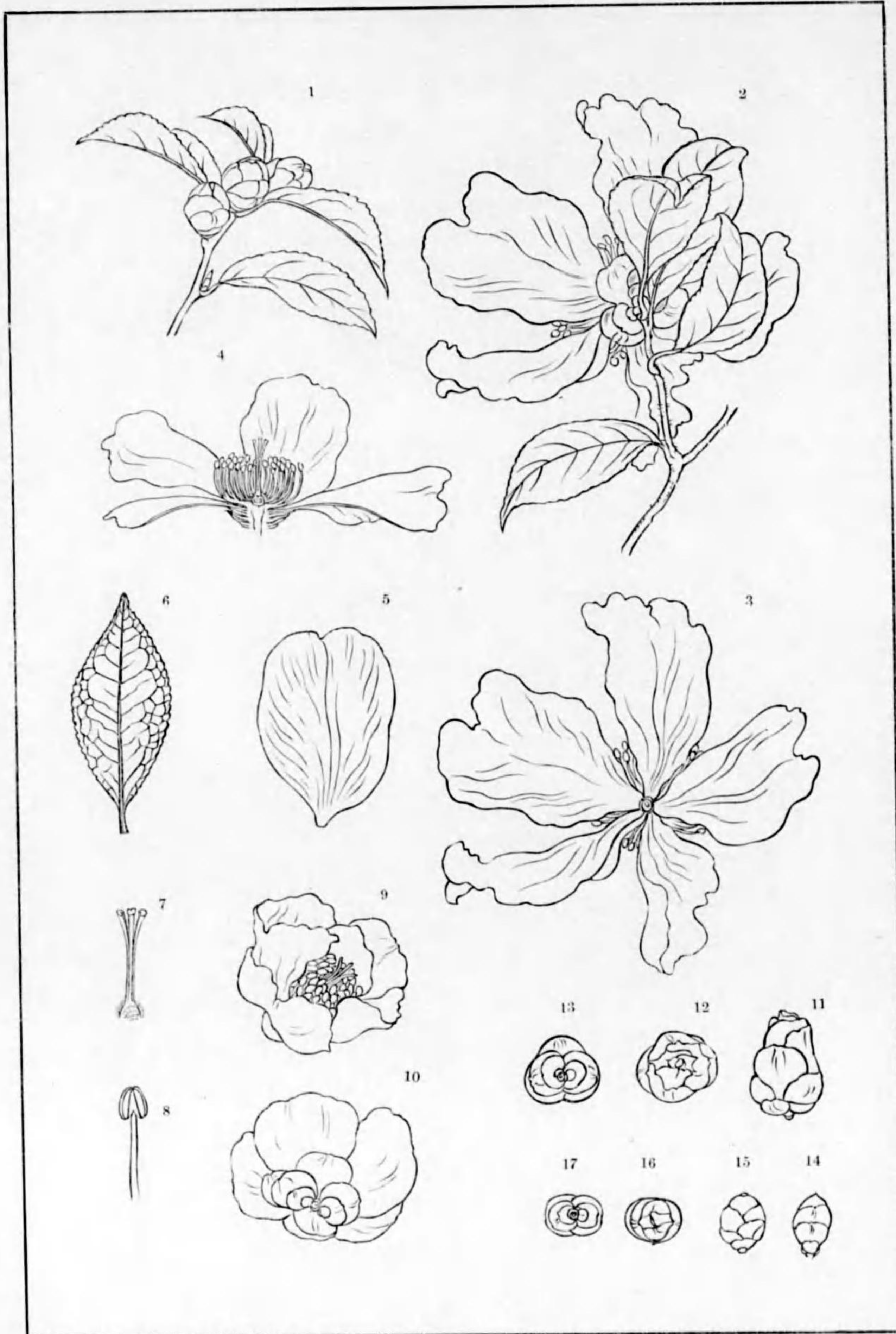
大正八年十月十五日

島田三郎

大正  
9. 5. 31  
購求

### 第一輯第六編例言

本編には菊通草(あけび)茶梅(さくらんくわ)龍膽(りゅうたん) 藥(りやく)吾(われ)つはぶきの五種を收む。  
 菊は解説の資料極めて多く、裁擇に苦み、通草、茶梅、龍膽、藥の四種は、傳説、典故、詩歌ともに缺乏し、百方搜索に務めしも、終に一の得る所なく、淺陋殊に太甚し、深く讀者の諒恕を冀ふ。  
 挿圖の印刷施彩已に畢りて、解説未だ成らず、作輟日を渉る、本編運刊の罪、一に解説者に在り。こゝに特記して謝意を表す。  
 次編には、罌粟、蜀葵、おほはるし、やきく、山百合、澤瀉の五種を收むべし。



1. 葉腋ヨリ蕾ノ出デシ狀 2. 花ノ背面苞ノ附着セル狀 3. 同苞ノ脱落セル狀  
 4. 花ノ縦斷面 5. 瓣 6. 葉 7. 雌蕊ノ廓大 8. 雄蕊ノ廓大 9. 半開 10. 同背面  
 11. 大蕾 12. 同上面 13. 同下面 14. 15. 小蕾 16. 同上面 17. 同下面



*Thea Sasanqua* Nois. var. *serrata* Sieb.  
 (梅茶) あくんさき

茶梅

Thea Sasangua, Nois.  
var. serrata, Sieb.

(山茶科 Theaceae.)

「さざんくわ」漢名は茶梅。其葉茶に類して花  
候梅と同じきが故に名づく。邦俗これをさ  
ざんくわと呼び山茶花の漢字を當つるは蓋  
し「つばき」の漢名なる山茶を誤用して詛れる  
ならんといふ。樹身低きは二三尺高きは丈  
餘。枝葉花實とも「つばき」に類すれども葉  
形小さく且つ嫩莖に密毛あるを以て異なる。  
冬期花を開き濃紅淡紅純白紅白間錯等の數  
色ありまた單瓣重瓣の別あり。花候極めて  
長く風霜蕭索の間に開落して芬芳相繼ぐ。  
亦冬期の庭園に缺く可からざる佳木なり。  
「さざんくわ」は獨り其花の妍雅愛すべきのみ  
ならず其實は搾りて油となすべく其葉は乾  
かして茶に代ゆべし。上田秋成の「追擬花月  
令」に曰く

茶梅觀。俗稱山茶。本同類。唯芬芳有無  
耳。花史曰。開諸花凋謝之候。花如「慈眼  
鏡」。而粉紅心黃。開最耐久。此土花白者。  
芬香秀。摘之陰乾。投之湯。氣韻可愛。  
味亦美。又花不開紅白。春芽萌發之時。  
採摘陰乾而收之。烹茗瓶中。撮一二葉以

投之。則大助茶氣。若過多。則如「丁香」  
却春茶韻。予居常所試也。  
又その「七十二候歌」に曰く、

山茶開 冬つばき花さへ實さへ深き香を  
つみ煮て我は酒にかへなん  
冬椿と名つけたる偽とやいはん。椿の屬  
なりと人のいへばぞ。春さく椿は香なし。  
茶を遊ぶ我友は春の芽を摘みて、日にあて  
ず乾かして貯ふる也。花も白きは煎るべ  
し。

これに據れば獨り其葉のみならず花も白  
きは亦飲料に供すべきが如し。冬椿の命名  
最も雅馴なるを覺ふ。  
按ずるに「さざんくわ」の葉を飲料とすること  
は必ずしも秋成の創意に出でしに非らじ、  
古今要覽稿に

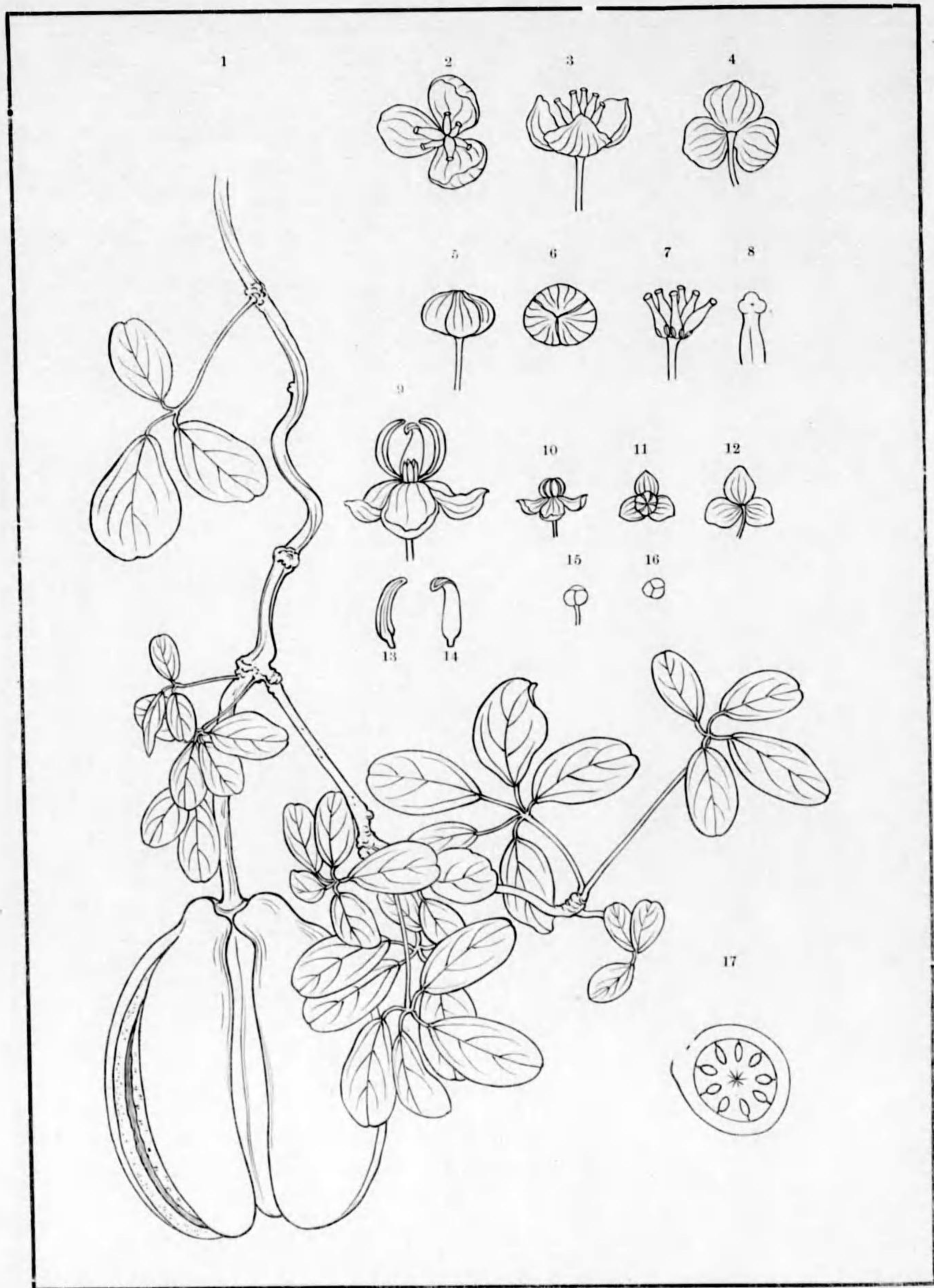
大隅國都といふ所にては家ごとくに此樹五  
六十或は七八十を植え置きて其芽ざしを  
摘みて茶に製し以て日用のたすけとす。  
其香氣芬芳常の茶よりも勝れたるにより  
て年若き女の神詣でなどする時はまるく  
けの帯を結び手ぬぐひ引きかぶりて此茶  
を製せしものを物に包みて香袋に代え用  
ゆるも此物の其地に生ずるは至て上品に

て、殊に香氣の勝れたるによりてのならは  
しなるもいとめてたし。

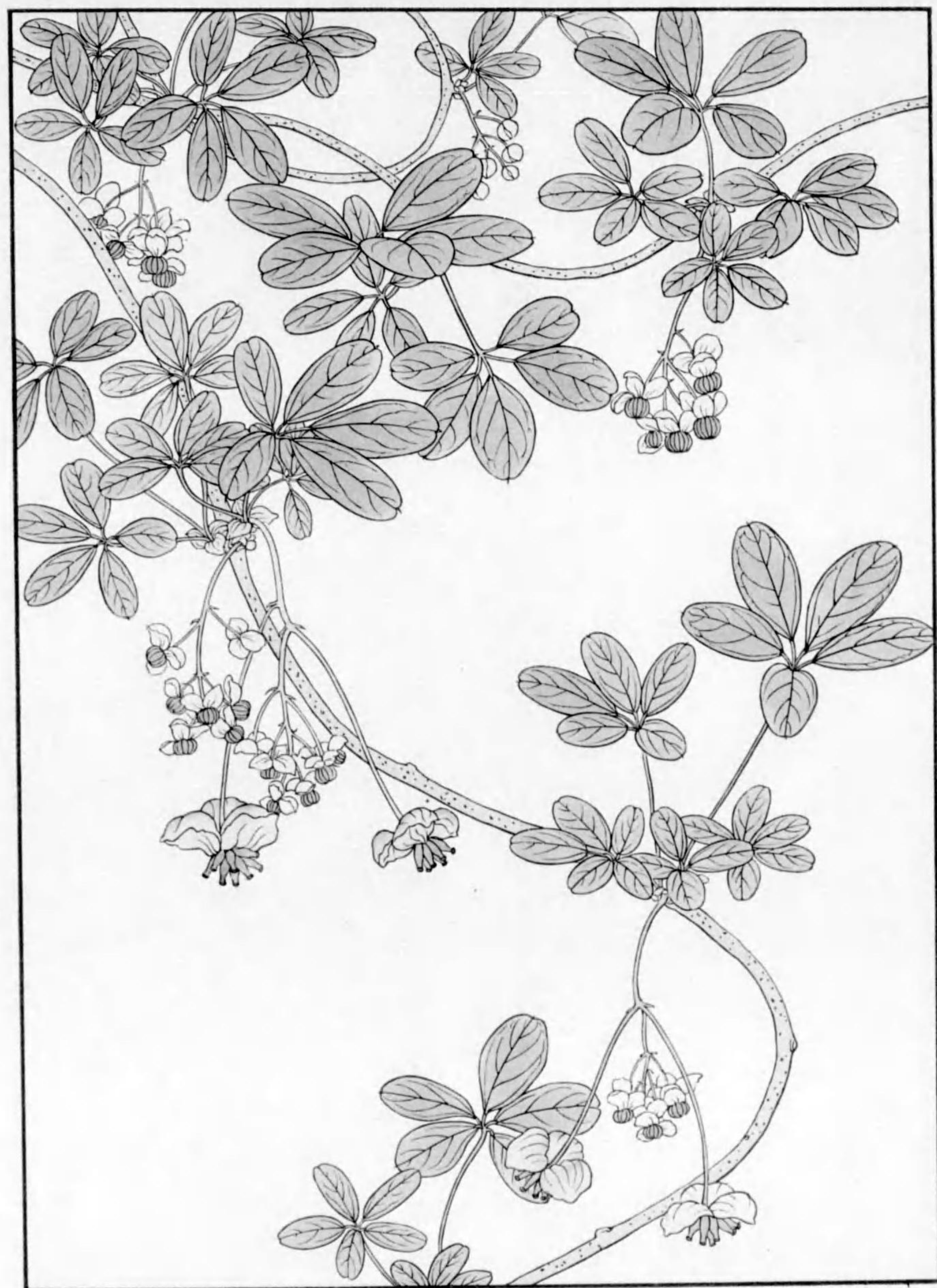
とあれば都地方にては夙に「さざんくわ」の葉  
を飲料とし又香袋にも代用せるなり。村家  
の少女兒が丸げの帯に手巾引き被りて「さ  
ざんくわ」の葉を佩服する風習は夫の都人士  
が人工的香水を薰ずるに比して一層可憐の  
態あらずや。

「さざんくわ」の觀賞此の如く廣しと雖も古來  
絶えて和歌の品題に上らず。唯だ幾かに俳  
句の流詠あるを見るのみ。  
山 茶 花 や 一 枝 枯 れ て い つ の ま い 道 彦  
山 茶 花 や 水 を た く 敷 と な り 李 農  
山 茶 花 に 圓 暗 く 日 の 夕 哉 言 水  
山 茶 花 に 鬚 斗 ほ す 磯 の 日 和 哉 保 吉  
山 茶 花 を 雀 の こ ぼ す 日 和 かな 子 規  
支那に於ても唐宋の詩賦一も茶梅に言及せ  
るものなく本草綱目また収録せず。此可憐  
の孤芳をして空しく風涼霜烈の底に開落し  
て寥寂閑ゆるなきを嘆せしむ。

小院碧寒未暖時。海紅花發書遲々。半深  
半淺東風裡。好是徐無帶雪枝。劉仕亨  
詩極めて凡庸誦するに足らざれども茶梅を  
詠せしもの殆ど此一首のみ。海紅とは茶梅  
花の紅なるものをいふ也。



1. 果實 2. 雌花上面 3. 同側面 4. 同背面 5. 同蕾側面 6. 同上 7. 瓣ヲ取り去リタル雌花  
 8. 同雌藥廓大 9. 雄花ノ廓大 10. 雄花 11. 同上 12. 同背面 13. 雄藥 14. 同内面  
 15. 雄花蕾 16. 同上 17. 果實ノ断面



*Akebia Quinata*, Decne.  
 (通木) びけあ

通草

Akebia quinata, Decne.

(通草科 Lardizabaleaceae.)

「あけびはあけみ即ち朱實の轉ならんといへど未だ詳かならず。漢名を通草といふ。莖に細孔ありて兩頭皆通するが故に名づく。山野に自生する藤本植物にして長さ二三丈に達すべく他の樹木に因依して蔓衍す。葉形長楕にして五葉一處に攢り生じ大なるものは四五寸あり。初夏嫩葉の間に細枝を垂れて花を開く。五瓣にして淡紫色又は白色。後に實を結ぶ形緑瓜の如し。秋に至りて漸く熟すれば外皮紫色を帯びて白から縦裂し、中より一團の白肉を露出す。味極めて甘美なり。支那人これを稱して荀子といふ。通草の賞玩せらるゝは其花にあらずして寧ろ其實にあり。秋日林藪の間に遊べば此蔓草の竹樹に纏絡して枝頭果實を着け離々として下垂するを見るべく好事者移して之を庭園に栽ゆ。亦甚だ趣あり。古歌に通草を山姫又は山女と詠するも蓋し其實の形に取れるならんか。散木集に、

山女を見て仲實

今日見れば山の女ぞ遊びける

俊頼つぐ

野のおきなをぞやらんと思ふに  
野のおきなは野老即ちところを隠指せるなり。また源太夫集に、

琳賢が許より徒栗通草など遣はして  
徒栗は心弱くぞ落ちにけるこの山姫の笑める顔見て

かへし行宗

いが栗は君が心にならひてやこの山姫の笑むに落つらん  
滑稽諧謔人をして捧腹を禁せざらしむ。古今要覧稿はまた此山女の名稱に就きて一の異聞を傳ふ。曰く

加賀國にあけび村と云ふ處あり。一には赤日村と書き一には山女村と書けり。山女の字を以てあけびと讀むこと如何なる義にや詳かならざりしに或人越前の國へ行くとき山中の茶店にやすらひ菓子様の物を乞ひしに外には何もなし山をんなのみといへり。夫にても出すべしといへばあけびの實を出せりと。これにて山女の字を用ゆる事も解せりとぞ。

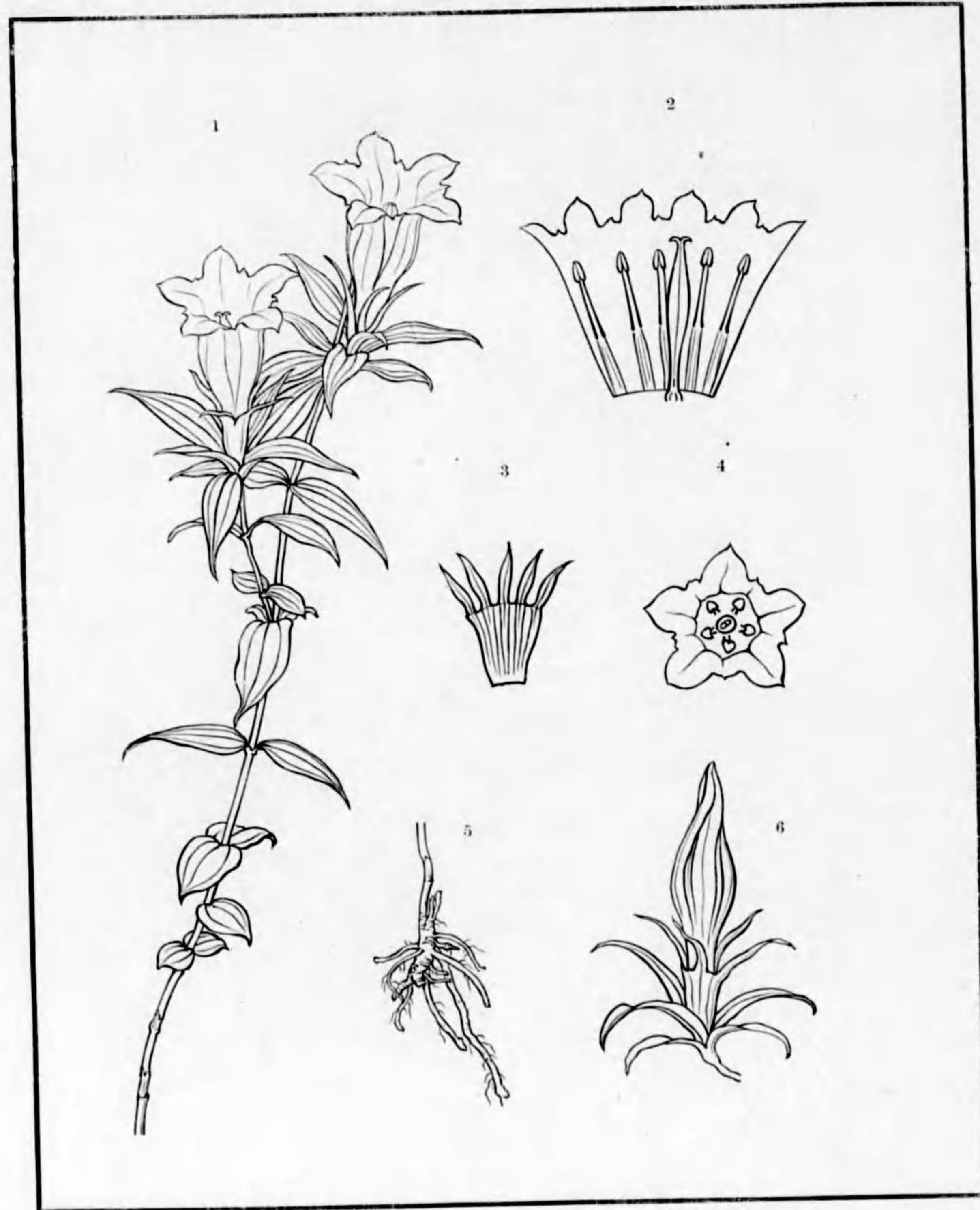
事の眞偽如何は得て詳かにすべからずと雖も山女の甘味は山家無上の好饗應なりしなるべく。

るべく。

口あけば腹わた見するあけび哉 芭蕉  
あたる日に笑みこぼれたる通草哉 後淵  
の如きも亦何となく滑稽味を帯ぶ。山女眞に愛嬌者なるかな。若し夫れ

ますらをが爪木に通草さし添へて暮るればかへる大原の里 寂然

に至りては分明に一幅の秋山歸樵圖。正に謝蕪村得意の好書題ならずんばあらず。通草は獨り其花實の賞玩すべきのみにあらず。其根は以て藥劑とすべく其莖は以て籃籠を製すべし聞く青森秋田の諸縣に於ては近年頻りに其製造を奨励して産額漸く加はると。然れども夫の盛裝冷服文履を履みて通草製の行篋を提ぐる都人士また焉んぞ深山幽谷の間に彼の離々の物ありてこれが原料となることを知らんや。



1. 枝莖ヲ抽出セル狀 2. 瓣ヲ展開シテ雄蕊及雌蕊ノ位置ヲ示ス  
 3. 萼ヲ展開シタル狀 4. 花ノ上面 5. 根 6. 蕾



*Gentiana scabra* Ege. var. *Buergeri* Maxim.  
 (嵯峨) うだんり

龍膽

Gentiana scabra, Bunge. var. Buergeri, Maxim. (龍膽科 Gentianeaceae.)

龍膽は和漢通名にして、りんだうは即ち龍膽の唐音を詠れるなり。陶弘景の説によれば、其味甚だ苦きが故に、膽を以て名づけしなりといふ。春宿根より莖を挿きて、高さ一二尺に達す。葉は竹葉に似て短し、故に篋りんだうと云ふ。無柄にして對生し三縱脈あり。秋に至れば莖頭葉間に青碧色の花を開く。三五葉出花冠筒狀を成し、筒端五裂して、桔梗の花の如し。晝開き夕閉ぢ、花候至て長し。蓋し亦秋卉中の可憐なるものなり。龍膽の名は、始めて延喜式諸國進年科雜藥の條に、山城國龍膽五斤、大和國龍膽三斤と見え、而して倭名抄には、和名衣夜美久佐とあり。専ら藥劑料として賞用せられしと雖も、枕草紙に、

龍膽は枝さしなどもむづかしげなれど、こゝろ花みな霜枯れはてたるにいと花やかなる色あひにてさし出でたる、いこそをかし。といへるを見れば亦舊くより雅客の觀賞にも入りしを知るべく、兼好法師は、これを家にありたき草の一つに數へ、白河樂翁は、

尾花の露重げに打しほれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきとし。と説き、今古の曲情均しく此小卉の上に鍾れり。龍膽何ぞ其味の苦きのみを取らん。そ

も、又其花の美掬す可きものある也。然れども龍膽若くは、りんだうの名は何となく唐めて歌格に入り難き故にや、古來歌人のこれを題詠せるもの殆ど稀れなり。風さむみ啼く雁がねの聲すなりうたん衣をまづやかさまし 伊勢

我やどの花ふみしだくどりうたん野はなればやこゝにしも來る 友則 川上にいまよりうたんあじろにはまづもみちばや寄らんぞすらん 讀人不知の如き、りうたんの名を讀み込みたるまでに、龍膽を詠せしにはあらず。其龍膽を詠じて、稍々趣あるものは、

りうたんの花の色こそ咲きそむれなべて 定家 秋はあさぢふの末 藤袴下のくゝりと見ゆるかなうら紫のりうたんの花 景樹

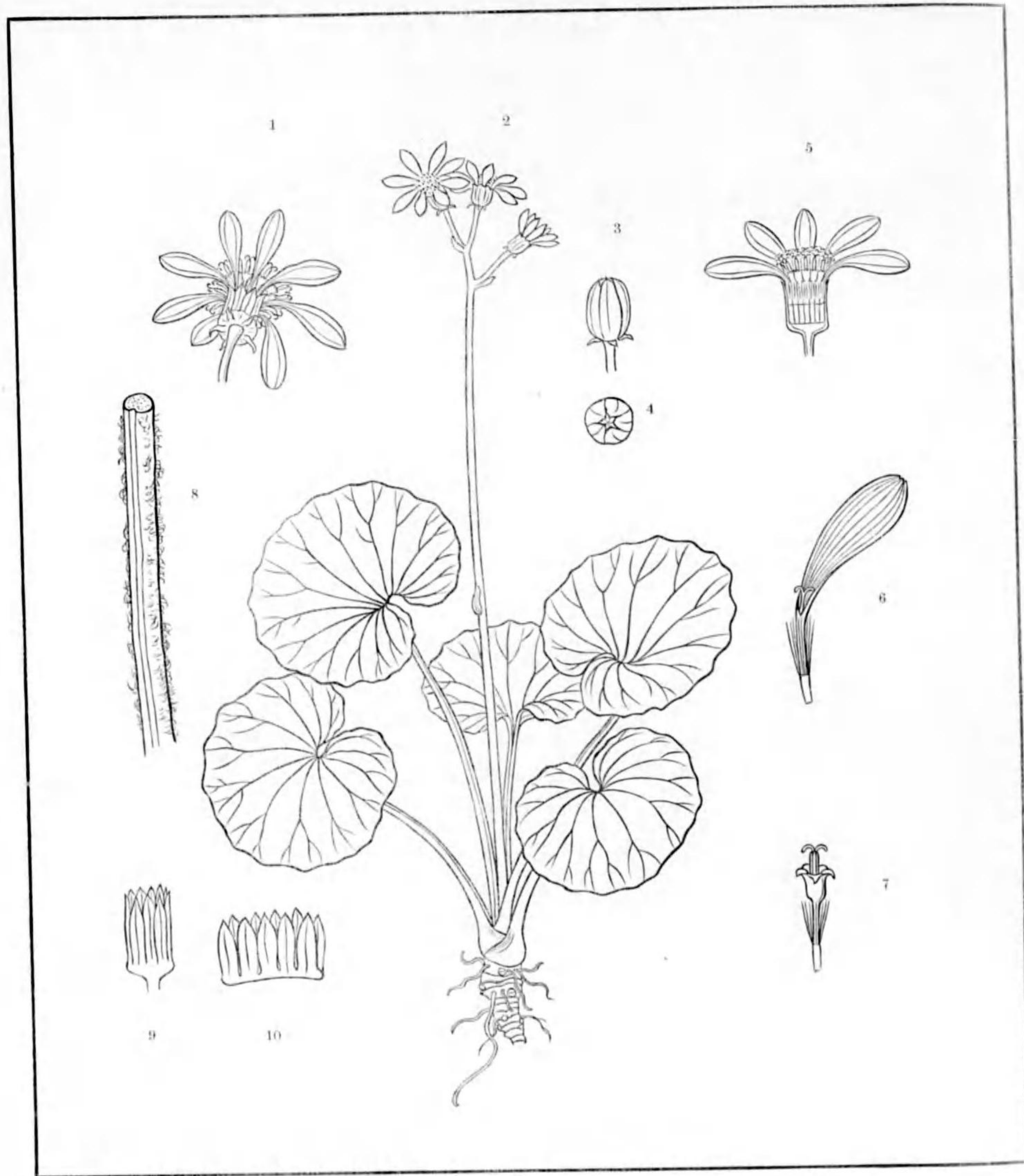
の數首あるのみ。俳句に在りては、天高し龍膽のたまり水 木塚 龍膽や御陵路の小笹原 冉士

水早し龍膽など流れ來る 乙二 此類猶ほ多くあらんと雖も、亦諷誦に堪ふるの佳句なきを憾むのみ。

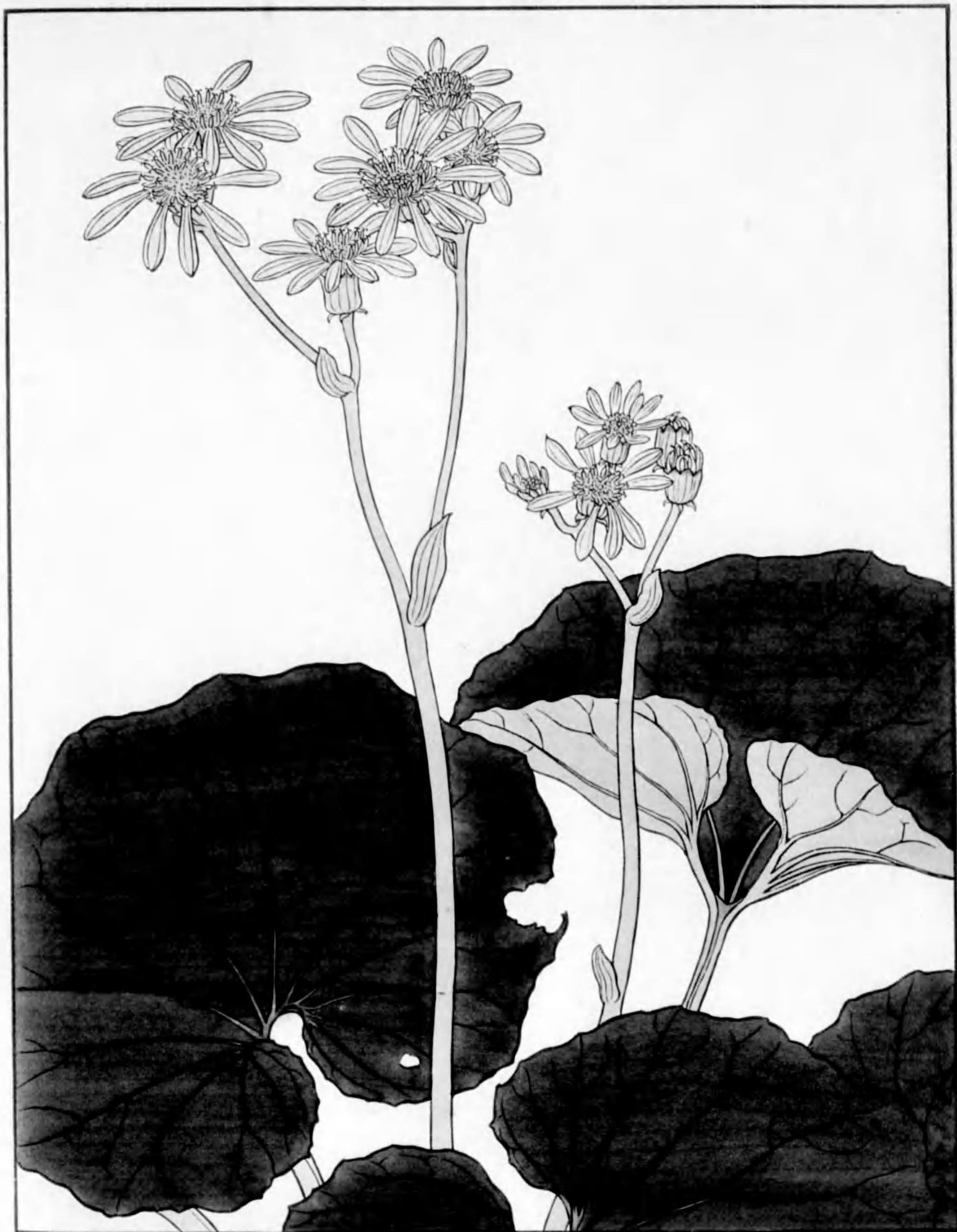
龍膽は、源氏の紋章として著る。清和源氏の流れを汲める諸家の紋章、多くは龍膽を用ふるものあり。若し細かに其様式の變化を考究せば、則ち此小卉の關涉する所意外に廣く且大なるを發見すべきに。嗟乎誰れか龍膽の爲に幽を聞き芳を騰ぐるものぞ。

昨年晚秋、翠芳園講行會の諸子と、西郊高井戸の村駈に遊ぶ。時に衆芳凋謝して、復た紅紫の眼を怡はしむるものなし。野徑を徜徉すれば、惟だ龍膽の荒叢間に開くを見る。碧瑠璃の色、滴らんと欲す。佐藤醇吉君これを採取して還る。こゝに掲載せる龍膽圖は、則ち其寫生に成りしもの。蓋ぞ披き覽て、筆墨外の秋色を掬せざる。





1. 花ノ背面 2. 全形 3. 蕾 4. 同上面 5. 花ノ縦断面  
6. 舌状花 7. 筒状花 8. 葉 9. 雄 10. 雄ヲ展開シタル状



Ligularia Tussilagineana, Makino.  
(香葉) きふはつ

蒙吾

Ligularia tussockifera, Makino.

(菊科 Compositae.)

漢名蒙吾は即ちつはぶきなり。説く者曰く、つはぶきはあつはぶきの略にて、其葉の厚きが故に名づく。或は曰く、津葉露の義にて、光澤あるを稱するならん。孰れか是なるを知らず、多年生の宿根草本にして、地下茎より長柄の葉を叢生す。葉は露に似て稍小さく、色深緑にして紺紫を帯ぶ。蒼潤光映、四時に亘りて凋枯せず。極めて愛玩に堪ゆ。十月の頭葉間に花軸を抜くこと二尺許、枝極を分ちて花を著く。形よめなの花に似て黄色また雅姿あり。

草花の観るべきもの多し。蒲公英、重々菜、連翹、菜花の春に於ける芍薬、罌粟、百合、燕子花、花、菖蒲の夏に於ける、桔梗、秋菊、牽牛花、秋海棠の秋に於ける、各妍を抽き秀を競ひて、冷紅妖翠、一時の盛観を極むと雖も、花候一たび過ぐれば、飄瞥跡なく、葉葉また風霜に随つて凋落し、空しく榮華一夢の感あらしむ。惟た蒙吾は則ち然らず。其花を開く菊、花と候を同うし、妍色を高秋に騰げて、衆芳の後塵となり、而して其葉葉また霜雪に耐へ、常緑變せず、以て四

時不絶の觀賞に資すべし。これ豈に卉中の一異品にあらずや。然るに和漢ともに甚だ之を愛重せず。萬葉古今、歴代の歌集に「つはぶき」なく、周詩楚騷、唐宋の詩賦に蒙吾の名を見ざるは何ぞや。余の知る所を以てすれば、古來この花を題詠せるもの、僅かに左の一首あるのみ。

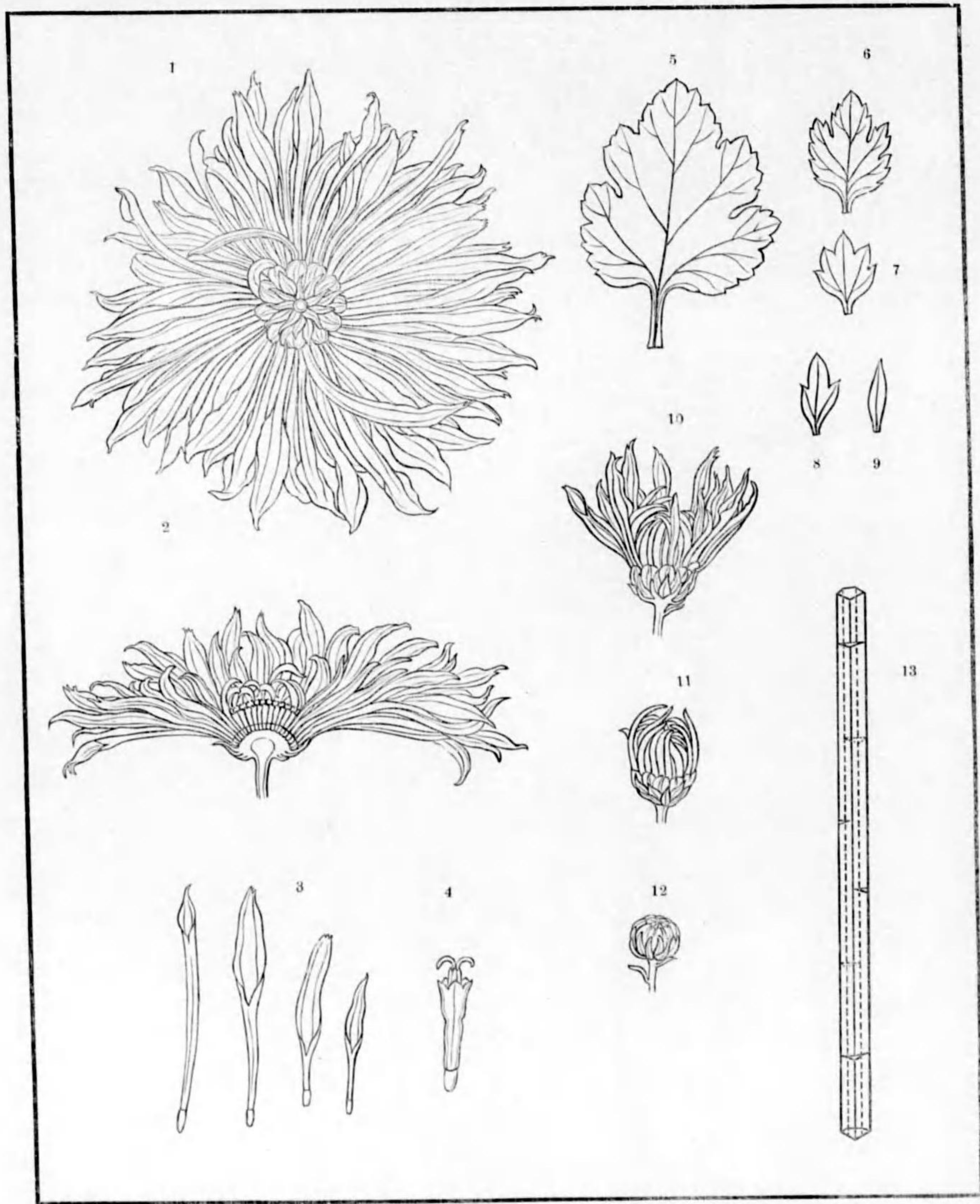
陸奥のこがねの花の色のみかかつはぶし  
ぎの名もあひにけり 樂翁

而も單に其名稱を異として、其花の黄金色なるを賞せるに過ぎず。問々好事の徒ありて庭園に移栽し、其葉形に随つて朝鮮獅子等の園藝名を設け、互ひに相誇るの風なきに非ずと雖も、固より此花の重きを爲すに足らざるなり。

植物學者中には「つはぶき」を以て漢名款冬花に當つるものあり。款冬花は唐詩に「僧房逢着款冬花」と歌はれ、從來我國の「ふき」に擬せられしものなり。款冬花の果して「つはぶき」なるや否は輕しく断定すべからずと雖も、晋の傅咸が款冬花の賦に、

惡朱紫之相奪、患居衆之易傾。在萬物之  
紋作「故霜華而弗退、逮皆死枯槁」獨保  
質而全形。華艶春輝、既麗且殊。以堅水

爲膏壤、吸霜雪以自濡。非天然之眞貴、曷能彌寒暑而不渝。  
とあるは、頗る「つはぶき」に適切なるを覺ふ。余且つ此數語を借りて汝を寵せん。  
大正九年一月二十九日日本書印刷の期已に迫り、督促甚だ急なり。南窓筆を呵して此文を草す。曉來雪ふり、園林一白。窓下の蒙吾、濕翠滴らんと欲す。



1. 花ノ背面 2. 花ノ縦断面 3. 舌状花 4. 筒状花  
 5. 6. 7. 8. 9. 葉 10. 半開 11. 12. 蕾 13. 葉序



*Chrysanthemum morifolium* Ramat. var. *sinense* Makino.

(菊) くき

菊

Chrysanthemum morifolium Ramat.  
var. sinense Makino.

(菊科 Compositae.)

もし我日本の國華と稱すべきものを求めば、それ櫻花と菊花とならんか。櫻花の春に發きて、温雅嬌艶、烟を暈し霞を裁する菊花の秋に秀て、淨潔幽麗、露を哀み霜に傲る、共に我國獨擅の盛觀にして、世界無比の清趣たり。但た櫻花は我が原生植物なれども、菊花は海外より傳來せるを異とすべきのみ。説菊花は果して我の原産植物に非ざるか。説く者曰く、きくはくはくはの約なり。菊花の形括るが如し。故に上古これをくはくはと曰へり。神代紀に菊理姫の神ある、以て證とす可し。神代紀の人名には、單に漢字を假借して音を寫せるもの多く、菊理姫の名あるの故に、直ちにくはくは即ち菊なりと推斷するは、輒す可からずと雖も、菊科に屬する植物は分布區域極めて廣く、地球上到る所に遍在すれば、我國の上古に於ても、亦今の所謂野菊、雞兒腸の類、所在の山野に自生せしなるべく、乃ち菊類の絶無なりしには非らじ、觀賞すべき佳菊なかりしのみ。然らば觀賞すべき佳菊の原種は何れの時、何れの國より傳來せしか。是れ亦聚訟一ならずと雖も、奈良朝の初め、支那より傳來せりとの説最も信憑すべきに近し。但た其の傳來の初めに當りて

は、これを觀賞するもの、僅かに支那趣味を有する少數の貴族に限られて、未だ廣く播布するに至らず。故を以て奈良朝の詩集なる懐風藻には、菊に題せる漢詩あれども、同時代の歌集萬葉には、菊を詠せる和歌なし。和歌の菊を詠せるは、蓋し平安朝最始の英帝桓武の御製

このころのしぐれの雨に菊の花ちりぞし  
ぬべきあたらし其香を  
を嚙矢とすべく、菊花の芳事も、亦これより説くべし。

平安朝に於ては、支那の風尚を受けて、菊花の觀賞盛んに興り、重陽菊の宴久しく恒例の公事となりて、百僚

長月のこゝぬかことに百敷の八十氏人の  
若ひてふ菊  
の歌を極め、着せ綿の風、新たに創意の巧を示して、兒女

よろづ代も人のわかゆる菊の上に眉をひ  
ろげて露をまつかな

の典を催す。然れども菊に對する趣味猶ほ低くして、延命益壽の支那思想外に出でず。培養の術も亦未だ精しからずして、千葉大瓣の佳品なし。其培養觀賞二つながら發達して、日東獨擅の芳瑞たるに至りしは、則ち近く徳川時代に在り。

黄菊白菊その外の名は無くもがな 嵐雪

珍を尙び異を喜ぶの風早く元祿に開けて、眞原益軒の花譜已に二百餘種の品目を擧げ、花壇綱目(享保元年)また珍花七十餘種を收む。寶曆天明よりして文化文政に迫り、觀賞益盛んにして、異品年に溢く所謂隱逸の花は一變して富貴の花たらんとす。流風の煽する所、或ひは

菊合せ花ものいはゞ嘆すべし 大江丸  
見劣りし人の心やつくり菊 抱 一  
の俗態なきに非ずと雖も、香國界の革命自ら此間に行はれし也。

蓋し菊の觀賞には、自然と人工との二方面あり。植棄てし菊の自らに瘦せ自らに開きて、赤きは只赤く、白きは只白菊なり、の風趣固く受すべし、受咬抱咲盛上咲し、だけ咲の姿態更に玩ぶに堪ゆ。よく人工の精を盡して、また自然の美を損せず。風趣姿態兼ね具りて、淨潔幽麗の觀を呈するこそ、我菊の國華たる所以なれ。

むかしは藤原頼通、四條公任と、春秋の花いづれか優れたるを論じ、春は櫻花を第一とす。秋は菊を第一とすといへり。これ蓋し千歳不易の公評なるべく、皇室の御章なる菊花は、朝日に匂ふ櫻花と、春秋に相並びて、長く東海君子國の徽象たらん。

大正八年十一月十日印刷  
大正八年十一月十五日發行

(非賣品)

不許複製  
羣芳圖譜

著者  
印刷者  
製版者

和田英吉  
佐藤醇之助  
福岡易之助  
東京市神田區南神保町二番地  
村上篤太郎  
東京市麴町區有樂町二ノ二

發行所

東京市神田區南神保町二番地

白水社內

群芳圖譜刊行會

所轄東京四六二〇番  
電話本局四二二三番

終